慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Louis Montrose, The subject of Elizabeth : authority, gender, and representation, Chicago, 2006.
Sub Title	
Author	仲丸, 英起(Nakamaru, Hideki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.78, No.1/2 (2009. 6) ,p.201- 208
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20090600-0201

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

Louis Montrose, *The Subject of Elizabeth : Authority, Gender, and Representation*, Chicago, 2006.

仲丸英起

欧米における文化史の方法論は、一九八〇年代初頭の言語論的転回を経て、「新しい文化史」という名の下に再編されていった。ピーター・バークによれば、この新しい文化史は、土台―上部構造という図式で文化と社会の関係を把握しようとするマルクス主義に対抗して、「表象」と「実践」という概念を標榜した。すなわち「表象」概念は文化の相対的自立性を強調するものであり、「実践」概念は対象領域をエリートの外部へと拡大し民衆の日常生活までも包含しようとするものであった。さらに一九九〇年代に入ると、歴史学にも及んだ構築主義の影響下で、階級やナショナリティなどの社会的規律は、表象の生産、流通、受容という一連の過程の中で構築されたものであるという議論が盛んに行われるようになった（長谷川貴彦訳『文化史とは何か』法政大学出版局、二〇〇八年）。

こうした潮流の中で、近年では歴史学のみならず文学の側から文化史へアプローチする研究が目立つようになってきた。エリザベス一世治世期における表象の問題に関しては、F・イエイツやR・ストロングら歴史学者による先駆的な研究が存在するが、本書は同時代を対象とした文学者による問いかけである。著者モンローズは文学を専門とするカリフォルニア大学教授であり、本書の他 *The Purpose of Playing : Shakespeare and the Cultural Politics of the Elizabethan Theatre*, Chicago, 1996. などの著作がある。

まず本書の内容を簡単に紹介したい。本書は序章および終章を含め全一九章で構成されているが、トピックごとに五部に分けられており、それぞれが緩やかな時系列順となるように配置されている。

序章 'Foundations and Trajectories' では本書の目的と研究手法が提示される。圧倒的な男性優位社会であった一六世紀半ばのイングランドで、全権力の源泉である王位に女性が就くという状況は、それ自体が逆説的な現象であった。そこで著者の主眼は、文学、歴史学、美学の枠に留まらない学際的な分析手法を用いて、絵画、木版画、詩、散文、パンフレットなど各種媒体を分析し、女王と寵臣たちがジェンダーから生じる矛盾をどのように利用し、またどのような影響を受けたかの解明に向けられる。

第一部 'Dynasty and Difference' で扱われるのは、エリザベス個人の来歴を特徴付け、それによってその統治を条件付けた表象であり、特に王位の正統性とその継承に力点が置かれている。第一章 'Contested Legitimacies' では即位時にエリザベスが直面した正統性をめぐる複雑な問題、すなわちエリザベスの両親の境遇や女性性および女性君主に関する同時代人の議論から生じた問題が論じられる。第二章 'Filial Emulation' では、テューダー王家を主題とする肖像画やページェントに見られるエドワード六世、メアリ一世、エリザベスというヘンリ八世の子女間における表象上の対抗関係と、各人のジェンダーから生じる差違が論及される。第三章 'The Tudor Sisterhood' では、メアリとエリザベスの表象が比較検討され、両者は表面的に見れば対照的であるものの、実際には女性君主に共通する特質が存在していたという指摘がなされる。第四章 'The Protestant Succession' では、ヘンリ八世一家を描いた数点の肖像画を用いて、宗教改革政策における連続性という観点から、エリザベス治世期におけるテューダー王家の正統性の確立に焦点が当てられる。

第二部 'Idolatries' は偶像崇拝をめぐるイデオロギー上の緊張関係が探求される。具体的には、偶像をローマ・カトリックの信仰や実践と関連づけこれを排撃しようとするプロテスタント急進派と、女王個人を称揚しそのイメージを崇敬する態度を植え付ける言説や実践を政治的に確立しようとする積極活用派との間の対立が議論の基軸となっている。第五章 'Imagery, Policy, and Belief' では、エリザベスの寵臣たちが君主の偶像化に対

して示した宗教的および世俗的視点について簡単に紹介される。第六章 'Iconomachy' では、一五七八年の女王巡幸に関するリチャード・トップクリフの描写の検討を通じて、エリザベスと聖母マリアの表象が対立と融合の狭間で揺れ動いている様態が指摘される。第七章 'Instrumental Adoration' では、宮廷および新世界で女王の寵愛を獲得しようとしたサー・ウォルター・ローリーの多様な活動に焦点を当て、女王の偶像が彼によって戦略的に「横領（appropriate）」されていたという指摘がなされる。第八章 'A Cult of Elizabeth?' では、あからさまに女王を賞賛しているテクスト、演劇、絵画などが、実際には様々な利害関係が絡み合った中から生み出されていた状況が明らかにされる。

第三部 'Queen and Country' で論じられるのは地政学的にみたエリザベスの表象であり、そのイデオロギー面での多様性と影響範囲が提示される。第九章 'The Geopolitical Imaginary' では、治世中のそれぞれ別の時期に描かれた、地政学的に脚色されたエリザベスの肖像画三枚が検証される。第一〇章 'Policy in Pictures' では、大陸で横領されたエリザベスのイメージに付加された敵対性と友好性との相互作用が考察される。これらの表象は、イングランド、フランス、スペイン、ネーデルランドを中心とする国際関係の中で、特に一五八〇年代に激しくなった地政学的、宗教的対立で利用するために案出されたものであった。第一一章 'Purity and Danger' では、アルマダの海戦で頂点を迎えるイングランドとスペイン、教皇庁との対立を、明瞭な擬人的形態で戯画化した文書や図像が分析の対象となる。

第四部 'Resistance' では、治世末期の二〇年間を中心として、女王の支配に対する反抗を示すような各種の文化的徴候がテーマとなる。第一二章 'Vox Populi' では、アルマダの海戦で明確となった国際的な宗教上または地政学上の抗争が、君主の権威に対する抵抗の形態へと転移し、これがカトリック教徒や一般のイングランド人によって利用されてゆく過程が考察される。第一三章 'Defacing the Queen' では、イングランドとアイルランドにおいて、様々な信仰を有する不満分子によってなされた、君主のイメージに対する表象上の暴力行為について分析される。第一四章 'Secrets of the Heart' で探求されるのは、女王の「自然的」および「政治的」身体、ならびに反逆罪で処刑されたカトリック宣教師たちの身体をめぐる、エリザベスの寵臣たちとローマ・カトリック

の敵対者たちとの宗教的ないし政治的対立である。

第五部‘Time’s Subject’では、老境に入った女王の身体的衰えに対する中傷が文化理解の面で政治的重要性を帯びていた状況、そしてこうした中傷を懐柔し名誉と威信を保持するためにエリザベスと寵臣たちが採った戦略が明らかにされる。第一五章‘A Queen of Shadows’では、治世末期において女王の肖像画が描かれる際の構想に含まれていた様式上および政治上の問題と、偶像としての女王のイメージを統制しようとする寵臣たちの試みが分析される。第一六章‘Mysteries of State’では、イングランドあるいは他の国々の外交官が作成した報告書をもとに、晩年の女王が衣服に関して採用した誇示と自己顕示の戦略、さらには女王が受け取っていた情報がジェンダー的政策に特徴づけられていた状況が示される。第一七章‘Through the Looking Glass’では、その死の間際にエリザベスを批判したり風刺したりする際に使用された、鏡を見る女王という修辞の逸話的な用法が検証される。終章‘The Jacobean Phoenix’では、ジェームズ一世のイングランド王位継承と、エリザベスの表象における主題を横領しようとする試みが簡潔に論じられる。

著者が本書で解明しようとしたのは、「エリザベスに関する著名な歴史学者であり伝記作家であるJ・E・ニール」とは「異なった種類の歴史的真実」、すなわち「エリザベス治世期における集団的想像力（collective Elizabethan imaginary）の働き」（p. 247）である。そのために著者が採用したのは、歴史学、文学、美学の垣根を取り払う、「近世文化に関する総合的で学際的な研究手法」（p. 8）であった。とはいえ前述したように著者は本来文学の専門家であり、基本的にアナロジーの論理によって議論が展開されてゆく点から見ても、本書はいわゆるカルチュラル・スタディーズの系譜に連なるものといえよう。

こうした構築主義的な研究手法で同一の対象が語り直されることで、従来の歴史学では見落とされていた見えない権力構造が明らかとなり、新たな視野が開ける場合がある。本書においてもそうした新たな知見が散見されるが、ここでは第八章において展開される、従来の「エリザベス崇拝（the cult of Elizabeth）」研究に対する批判を取り上げてみよう。イエイツ、ストロング、もしくはS・アングロらによって繰り返し指摘されてきたように、特に治世中期から末期にかけて、「処女王エリザベ

ス」を礼賛する言説は同時代の様々なメディアで生産され消費されていた。そして信仰の対象としてエリザベスを崇めるこうした文化的現象は、政治的および宗教的な状況を背景として、自発的に出現したとされてきたのである。しかし著者はエリザベスを賞賛する目的で創出された図像、ページェント、詩、散文が、その場その場の状況に合わせて意図的に利用されている点を指摘し、「エリザベス崇拝」が「一般の人々の王権への忠誠心を喚起し、それを支える社会体制への服従を確実」にするために、「政治国民を構成する人々によって操作されたイデオロギー装置」（p. 113）であったと主張する。これは明敏な洞察であり、法制度や統治機構といった伝統的歴史学が対象としてきた領域とは異なる側面で、エリザベス体制を再考する必要性が想起させられる。

次に本書の副題でもあり、一貫して議論の中心となっている二つのテーマについて述べておきたい。一つはジェンダーの問題、すなわちエリザベスが女性であったという偶発性から生じた様々な影響である。家父長制原理が強力に存在していた当時のイングランドにあって、エリザベスの女性性は各種の障害をもたらしたが、同時に寵臣たちはこれを統治に活用しようともした。こうした状況で生み出された多様な表象を分析することで、著者はエリザベスの性別がその統治手法一般、ならびに表象の使用方法に与えた甚大な影響を明らかにしている。例えば第一五章では、晩年のエリザベスが自らの肖像画を描かせる際に、遠近法や明暗方を用いた盛期ルネッサンス様式を好まず、神秘的な処女性を喚起させるような、影のない理想化された様式を好んだとされている。それは「処女王エリザベス」という表象を女王自身や廷臣たちが「便利な政治的フィクション」（p. 204）と見なし、実際の女王の身体に老いが目立つようになっても、この表象の有用性を維持しようとした証左といえるであろう。女性君主であることは、正の側面も負の側面も併せ持っていたのである。

二つめのテーマは同時代における表象の重要性とその多義的性格である。本書を通読すれば、同時代の政治、宗教、外交など様々な場面で表象が果たしていた役割がいかに大きかったかが容易に看取される。そしてその重要性は、様々な解釈が可能であるという表象の多義性によって増幅されていた。本書でも多用されている「横領」という概念は、アナール派第四世代の旗手であるロジェ・シャルチエらによって強調されたものである（松

浦義弘訳『フランス革命の文化的起源』岩波書店、一九九四年、長谷川輝男、宮下志朗共訳『読者と読書』みすず書房、一九九四年）。シャルチエは近世フランスの印刷文化研究の中で、テクストの生産者が何らかの意図にもとづいて創出した表象が、受容される際に生産者の本来の意図とは関わりなく解釈され、変容された形で解読されてゆく過程を明らかにしたのであるが、本書はルネサンス期イングランドにおいても同様の過程を見出している。第七章では治世中期までに形成されていった「処女王エリザベス」の表象が、実際にはカトリックや古典古代の表象を横領し総合したものであった点が指摘されるが、それは当然カトリック教徒からの批判の対象ともなっていた。このように様々な種類の表象が物理的にも象徴的にも多様に横領されており、一義的な解釈を下す困難性が説述されている。

以上のように、本書はジェンダーおよび表象という視座を中心としてエリザベス治世期イングランド史研究に新たな光を投げかけているが、他方で大きな問題点も存在している。ここでは評者の気付いた限りで四点ほど指摘しておきたい。

第一に、著者は本書が「全領域の近世研究者たちが、放逸的ではなくて啓蒙的であると考えるような研究であると願いたい」（p. 8）と述べているが、歴史学的に見た場合、特に新たな知見が生み出されているとはいいがたい。著者が立論を行う上で参照している議論は、すでに評価の確定している研究者の著作を参照したものである。著者は「伝記的、文学的研究領域におけるエリザベス女王に関する最近の著作の大部分は英雄的な叙述に専心してきた」とし、本書で焦点がおかれるのは、それらとは一線を画す「複雑かつ多様で、相互に矛盾し対立的であるような」言説の形成および受容過程であるとしている（p. 2）。しかしこうした英雄史観に対する異議申し立ては、T・S・フリーマンやJ・キングの研究をはじめとして歴史学では既に一般的なものであり、新たな問題設定の対象になるとは思われない。また著者が大きな関心を払っている宗教の問題にしても、エリザベス即位時の一五五九年における国教会体制再編の過程で、女王と寵臣たちとの間に意見の相違が存在し、それがその後のエリザベスの統治体制に大きな影響を与えたという主張は、P・コリンソンやJ・ガイらによってかなり以前から展開されているものである。もっともこういった

問題設定の隔たりは、文学と歴史学の間に存在する対象への認識の差違に起因するものかもしれない。

上記の点とも関連するが、二点目として方法論上の問題が挙げられる。著者が本書の中で繰り返し述べているように、表象は常に多義的性格を有しているものである。そうであるとすれば、史料批判を行わず恣意的に選択されたと思われる図像や詩、パンフレットなど多様な媒体に現れた表象を既存の議論を軸として解釈してゆくという著者の手法では、そうした議論の枠組みに収まらない解釈は捨象されてしまうのではないかという危惧が生じる。前述したように、確かに著者は最初から実証を旨とする歴史学的な手法を放棄し、各領域を横断するようにして「文化的雰囲気」(p. 247)を解明しようとしているのであるが、そうして明らかになった「文化的雰囲気」がどの程度の客観性を有し、またこれまでの議論との差異がどの点にあるのかは、本書では最後まで不明瞭なままである。

次に各媒体の製作者と受容者との関係がある。著者は一貫して表象の受容のされ方に力点を置いており、それが生み出される過程についての論及は限定的である。しかし絵画や文章などは、本来製作者が受け手に何らかのメッセージを伝達するために生産されるものである。そして製作者の意図がそのまま受容者に理解されない際に生じるのが、表象の横領という現象であるはずである。したがって生産の場と受容の場との間で起きる表象の変容にも目を向け、製作者の意図についてもより踏み込んだ分析を行い、それと表象受容のあり方との関係が問われる必要があったのではないか。具体的には、画家を始めとした各媒体の生産者とパトロンとの関係、また生産者の経歴や彼らが置かれていた状況などについての言及が、より詳細になされるべきであったと思われる。

最後に表象の受容範囲についての問題がある。著者が分析の対象としている図像やテクストは、カトリック教徒による出版物などを除けば、大部分が宮廷サークルの内側で受容ないし消費されたものである。史料上の制約があるのかもしれないが、表象研究としては対象範囲がやや狭小に過ぎる嫌いがある。冒頭に述べた用語に従えば、「実践」領域における視点が欠如しているといえる。統治における表象の重要性を主張するのであれば、その影響範囲をこうした狭い領域に限定するのではなく、少なくとも同時代の地方統治を担っていたジェントリ階層にまで拡大して、こうした人々が各種媒体の表象をどの

ように受容していったのかについても、目を配る必要があったのではないだろうか。一六世紀後半にジェントリの教育水準が飛躍的に向上していった点を踏まえれば、彼らに対する表象の持つ影響力は既にかなり増大していたと推定されるのである。

以上、本書の意義と問題点を評者なりに整理してみた。全体を通じて明らかになったのは、従来歴史学の範疇であった研究対象に対して、本書のような学際的手法による分析が一定の有効性を有していると同時に、必然的な限界も伴っているという点である。だが上述したような問題全般を方法論の相違に帰するだけでは、文化史研究の進展は望めない。昨今盛んに文学の側から投げかけられている問題提起に対して、歴史学としてどのような回答を提示できるのか、改めて問い直す必要があるだろう。